



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴史家 **白駒妃登美**

二年前の大河ドラマ「八重の桜」の舞台になった東北の会津藩。その名門・山川家の七人きょうだいの末娘として生まれたのが、今回の主人公・大山捨松です。

時は幕末。ご承知のように、「旧幕府軍」の中心的存在である会津藩は、主に薩摩藩や長州藩が率いる「新政府軍」に対して、慶応四年から明治元年にかけ、数か月間にわたって戊辰戦争を戦いました。

会津藩の家老を務める山川家は、家族総出で籠城。その中に、満七歳の捨松（幼名：さき）の姿もありました。やがて会津若松城は激しい砲撃にさらされます。捨松は大人たちに交じって負傷者の看護や食事の支度、さらには「焼玉押さえ」という危険な作業にも当たりました。自陣に撃ち込まれた不

❁ 賊軍・会津藩の娘

——日本初の女子留学生・大山捨松①

大勢に抗わず、使命に生きる



大山捨松 (1860-1919)
会津藩家老の山川家に生まれる。満11歳で初の女子留学生として渡米し、満22歳で帰国。スイスに留学経験のある大山巖と結婚し、洋風夫妻と呼ばれる。後年は各種慈善活動に尽力した。

【イメージイラスト】
アオジマイコ

発弾を、冷やして爆発しないように処理するのです。時には作業中に爆発し、死傷者が出ることもありました。

こうして老若男女が藩の存亡を賭け戦い抜くも、善戦むなく会津藩は壊滅。捨松は賊軍の娘として明治の世を生きることとなります。その捨松が、十数年後に「鹿鳴館の華」と呼ばれるようになるなんて、いったい誰が想像できたでしょう。

そこで、今回は賊軍の娘からヒロインになるまでの彼女の人生物語をご紹介します。

❁ 十一歳で異国の地へ

明治初期、近代国家としての条件を整えるために欧化政策をとっていた明治政府は、若者を十年間、米国に官費留学させることを決めます。これに反応を示したのは、明治政府の中核をなす人々ではなく、皮肉な